

「必笑」今年も笑顔の一年に

(2015.1.06)



年の瀬の寒い朝、身を縮めて事務所前の門に入ると、私の姿を見つけて3人の女の子が、満面の笑みで、競うように走って来た。元気に「おはようございまーす！！」とあいさつして、私の心と手にタッチした。私も急に暖かくなり「おはよう！」とあいさつを返した。「いつもいつも、とても素敵なあいさつをありがとう。みんなのお蔭で、今日も素敵な一日になりそうだ」と言って、3人をまとめてぎゅーと抱きしめた。玄関に入ろうとすると、私の背後から、3人の嬉しそうな声が聞こえた。「よかったねー、理事長先生に誉められちゃった」と。振り返ると、3人はもう園庭の方に走り去っていた。私は前よりもずっとポカポカと暖かくなった。

幼稚園では「笑顔で明るく元気にあいさつ」をテーマにしている。朝「園長先生、おはよう」とみんな元気にあいさつしてくれる。モジモジしている子には、毎日こちらから、心のカギを外すように繰り返し「あいさつ」する。小さな声で「お・は・よ・う」とモソモソ言った時は「聞こえたよ。あいさつを返してくれると、とても嬉しい、気持ちいい。君も気持ちいいだろう」と言うと、やっと笑顔を見せてくれる。こうなれば、次はもっと元気に笑顔になって「あいさつ」するようになる。

昨年の夏の甲子園には、笑顔が溢れていたという。苦しいピンチの時も笑顔。試合に負けて悔しいはずの時も笑顔。泣いて下を向いてはダメなのだ。石川県の星稜高校が、昨年のチームのテーマを「必勝」でなく、「必笑」とした。石川県大会の決勝戦。9回まで0対8で負けていた。それでも選手たちは笑顔で顔を上げていた。そして、9回裏、9点をあげて逆転サヨナラの勝利を手にした。「笑顔」は心も体も開放し、リラックスさせ、プラス思考にする。今までは勝ち負けにこだわりすぎた。甲子園では、敗色が濃くなると、泣き出す選手がいる。そういうチームは、その時点で負けを決めていた。必ず負けた。

笑顔は、自分を肯定し積極的にする。子ども達に笑顔を投げかけることは、子ども達も自分たちが認められ、肯定されていると、自尊感情を育てる。それが子ども達を成長させる原動力になる。私達も、子ども達を指導、教導すると称して鬼の形相で教え込む愚を犯していないだろうか。子ども達も大人も、みんな「笑顔」で生活しましょう。

笑う門には福来たる 2015年元旦



もう春ですよ

(2015.2.02)



もうすぐ節分、明けて立春。寒い寒いと言っているうちに、春はもうすぐそこまでやって来ています。東京では梅の花が咲き始めたそうです。インフルエンザが暴威をふるった幼稚園もありますが、発表会が近くなり、子ども達の明るい歌声が聞えてきます。

しかし、年少児は、そうはいかないことがあります。クラスの前を通ると、声を張り上げ、どなっているような声もあります。「もう春ですよ。♪♪」「灯りをつけましょ♪♪」ではなく、「もう春だ!」「灯りをつけろ!」と叫んでいるような声が聴こえることがあります。そっと引き戸を開けクラスに入ると、いました。額に青筋を立てて真っ赤な顔をしてこぶしを丸め力を込めて張り上げている子が2~3人いました。一人が大声を出すと、これに負けじと他の子も頑張ってしまう。自然とピアノの音も大きくなってしまふような気がします。先生にピアノを止めてもらい、「ケンカしているのじゃないから、怒鳴らないで先生にいい声で歌ってくれる?大きく口を開けて、きれいな声で聴かせて。今日は園長先生がお客さん」といって子ども達の前に座ります。すると怒鳴り声が止んで、きれいな声になります。

子どもは周囲の環境に敏感です。大きな声で話していると、大きな声を張り上げるようになります。先生がいつもいつも大きな声を出していると、子どもは更に大きな声になり、保育室が騒がしくなります。静かな声を出していると、静かになります。ご家庭では「おかあさーん」「ハアーイ」「ナアニー」と答えているでしょう。「○○くん!」「はい」とはなりませんよね。幼稚園では、点呼を取る時は、「○○くん」、と呼ぶと元気に「はい!」と答えますが、日常的には同じように優しく呼んでいます。

「コーラス」というフランス映画がありました。荒れた孤児院の子ども達が「コーラス」を通して心を育てていく、とても印象に残る良い映画でした。その中で、子ども達は伴奏なしのアカペラできれいな声で合唱していました。私が見学した欧米の幼稚園の保育室には、ピアノがありませんでした。先生がアカペラで唱って指導しているのでしょうか。ピアノをたたかないで歌うことも必要でしょう。日本でも昔からお母さんが歌を唱って口承で童謡を伝えていました。CDを聴かせるより、お母さんのなまの声を、直接聞かせて伝承していく方が良いと思うのですが・・・



E Q（こころの知性）

(2015.3.02)



現代は子ども達にとっても、大人にとっても、辛く生きにくい時代になっている。子ども達は、両親・祖父母兄弟・近所の人々、他の子ども達と転げ回って遊んで、人間としての基礎的な情動や人と関わる力、社会性を身に付けてきた。しかし、社会環境が変化し、それができなくなっている。子どもの数も少なく、兄弟姉妹、他の子との関わり、祖父母と同居する家も少なくなり、隣近所のおじさん、おばさんとの関わりもなくなっている。路地で遊ぶことは勿論、原っぱも、子ども集団もなくなり、家でテレビ・DSゲーム・メールのやり取りでは、人と共感したり、衝動を抑えたりする人間としての能力を育てることが難しくなっている。

一時期、世界的なベストセラーになったゴットマンの「EQ教育」がある。親としてのこころと、親業を果たしていくうえでの適切な対応方法を示した内容であるが、IQよりEQ（心の知性）を育てることが、大人になって幸福な生活をするためには大切であることが知られるようになった。こころの知性（EQ）は、情動の自己認識と自己尊重、自制心と自分を励ます能力であるが、この基礎は、0歳から思春期までに形成されるという。EQは人格の基礎になり、EQが良い人は、友達とうまくいき、体も心も健康で、成績が良く、幸せな人生を送っているという。

一列に並んで待っているのに、順番を守れず、無理矢理割り込んで、みんなにズルイぞ！と押し出されると、泣いて暴れ、我を通そうとする子がいるが、他人にも自分と同じように思いがあり、欲求があることが理解できるようにならないといけない。そして、我慢しなければならないこともある。おやつのカッキーをみんな同じに配っているのに、自分だけもっと食べたいと、泣いて欲求を通そうとする子がいる。入園当初は「いただきます」のご挨拶まで待てない子がいたが、今ではみんな待つことができるようになった。順番を守ることもできるようになったし、友達とのいさかいも少なくなった。自己抑制できるようになり、友達との関係もスムーズになった。幼稚園は小さな社会、人との関わりの中で、ぶつかり合い、葛藤し、心と体を育てていく。

中教審で話題になった「ペリー・プレスクール」でも、良い幼児教育を受けたか否かが、子ども達の将来に決定的な影響を与えることが伝えられた。待機児童対策ばかりに目を奪われ、幼児教育の中身、子ども達の環境はどうでもいいと考えているように思える。フレーベルの時代から、今日まで培ってきた、真の幼児教育を守っていかなければならない。



マシュマロテスト

・ ・ 3月園便りで書いたEQ（心の知性）の続き ・ ・ ・

(2015.5.01)

MAY 

随分時間が経ってしまいましたので、HPの3月「理事長の話」を再読してから読んで頂けると幸いです。

スタンフォード大学の心理学者、ウォルター・ミッシェルが、子ども時代の自制心と将来の社会的成果の関連性を調査した著名な実験に「マシュマロテスト」がある。この実験とその後の追跡調査により「自制心」、自分をコントロールし、目先の欲求を辛抱する力が、社会の中で成功するためには重要であることが分かった。

実験の方法は、幼稚園の四歳児を、机と椅子以外何もない部屋に通し、皿の上にマシュマロを一つ載せ「これを君にあげるけど、私はちょっと用があるので外に出るが、十五分だけ食べるのを我慢して待っていられたら、マシュマロをもう一つあげる。食べてしまったら、二つ目はなしだよ」と言って部屋を出る。実験に参加した子のうち、我慢してマシュマロを食べずにいられた子は1/3ほどだった。

興味深いのは、実験結果と子どもの成長した後の社会的成功との間に、相関性があることだった。最初の実験から十八年後の1988年に追跡調査が実施された。その結果、幼児期における自制心の有無は、その後も持続し、マシュマロを食べなかったグループが優秀と評価され、大学適正試験（SAT）の点数には、トータルで平均210ポイントの差があった。2011年には更に追跡調査が行われたが、この傾向はずっと継続していた。幼児期にはIQより、自分をコントロールできる心の知性（EQ）の方が、将来の成功のためには大切であることが実証された。



男の子は弱くなった！

(2015.6.01)



五月晴れの爽やかな日に、年長児を連れてザリガニつりに出掛けた。目的の公園の沼地に着き、釣りを始めると、すぐにあちらこちらで歓声が上がった。夢中になってザリガニつりに集中する子と、釣ろうともせず「釣れないよー」を連発し、竿を振り回しているだけの子もいた。ザリガニが釣れなくて「ザリガニが欲しい」と言っている子たちに、ザリガニを地面に釣り落とし「自分でつかまえたら君のものだよ。」と言うと、小さなザリガニに恐れをなし、ただ見守るだけの男の子。それを見ていた女の子が「怖くないよ。後ろからこうして捕まえるの」と伝授している姿があった。ザリガニや昆虫にふれる経験の差があるのだろう。これから自然に触れる機会を増やしていかなければならないと感じた。

それより問題なのは、帰り道で感じたことである。遠歩きには適度な距離であり、空気もカラッとして歩くには最適な日であった。昨年、年少児と同じ場所に行った時には、鬼ごっこをしたり、いっぱい遊んで帰ってきた。十分すぎるくらい動いたので、年少児にとって帰りはきついかнаと思っただが、園までの山林の一本道をみんな走って帰った。しかし、今年の年長児の中には「疲れたー」「もう歩けないよー」を連発する子が何人かいた。「こんなところ、バスでくればいいのに～」「園長先生が、バスを取りに行つて迎えに来てくればいいのに」と言い出す子もいた。ザリガニ釣りであるから、あまり活動したわけではない。いつも車で移動しているので、歩くことが少なく、体力がない子が多くなったのか？偶然のことかも知れないが、幼稚園までの一本道に入って、私と先頭を争って走った子は、女の子の方が多かった。

人の行動は、歩くことが基本である。歩行は体内の血のめぐりを良くし、活力を生む。ある小学校で、子ども達に集中力がなく、学習効果が上がらないので、朝、授業前に、思い切り体を動かして遊ばせた後に授業を行ったところ、学力が急上昇したということが発表された。老人のボケ予防にも、あるくことが効果的だという。歩くことで全身の（脳にも）血行が良くなるのである。これからは自然の中で、動植物・昆虫類に興味を向かせる。できる限りバスを利用しない。毎週、少しずつ遠くまでお散歩（遠歩き）することを先生方と確認し合った。



人は見かけによらないことが多い

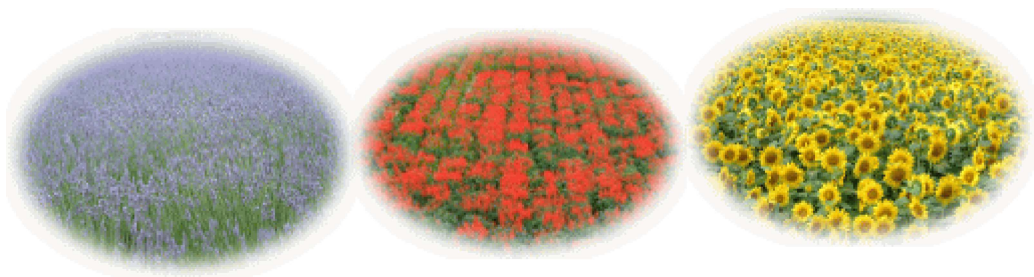
(2015.7.01)



人は外見から、人を評価し判断する。特に、初対面の人に対しては、第一印象で左右されることがある。服装や身なり、あいさつの仕方、言葉使い、表情から、その人がどういう人間か判断する。職業、身分（？）地位等で、見かけが違うことが多いし、医者は何となく医者臭いし、教師は教師臭いし、ヤクザと政治家は明らかにその筋というような、似たような風体がある（と思う）。判断材料がない中から、まずは外見から判断するのはやむを得ないが、それは後で思い違いであることが往往にしてある。

学生時代に、自分を試したくて東北・北海道を無銭旅行したことがある。当然移動はヒッチハイクである。街道沿いで、何時間も止まってくれる車を待って立っていて感じたことがある。乗用車は止まってくれなかった。止まってくれる車は、殆どトラックであった。特にダンプが多かった。見かけは怖いおじさんやお兄さんだったが優しくった。昼食をご馳走してくれたり、仕事や泊まる場所を世話してくれた。この時、人は見かけじゃないという経験をいやと言うほど経験したのに、時と共に忘れていた。

大学時代の友人が、東京に出てきたので、一泊伸ばして一杯やりたいと電話してきた。楽しいひと時を過ごした。東京からの帰りの電車は混んでいた。途中で子ども連れの若い夫婦が乗ってきた。お母さんはベビーカーを押し、お父さんは、パーマをかけサングラスをかけた二歳くらいのお姉ちゃんを抱っこしていた。子どもにこんな格好させ、と思った。しかも深夜に近い。若い夫婦の格好も、今時の若者らしく、ピアスをしてブカブカのズボン(いま時はパンツと言うのか)に、似合わない帽子を横にかぶっていた。あまり好ましい人種ではないと感じたが、大変そうなので席を譲ろうと声をかけた。「いえ、大丈夫です」と遠慮するが、（大丈夫ではなく、結構ですと言うんだ、と心の中で思いながら、）さっと立って車内の奥の方に去った。今度は二人で「ありがとうございます」と大きな声でお礼を言われ、なんだかさっきまでの先入観（差別）が恥かしいほど、彼等に好印象を持った。しばらくすると若い夫婦の降車駅近くになり、奥の方で立っていた私のところまで、若いお父さんがやって来て、「ありがとうございました。助かりました」と礼を言った。私は周囲の人々の視線と、自分の心の内に、とても恥ずかしくなった。人は見かけで判断してはいけない。



自制心を育てる

(2015.9.01)



子どもが泣き叫び、ぐずられると、根負けしてすぐにお菓子を与えたり、玩具を買い与えていると、子どもは泣きわめけば欲求は通ると学習し、我慢することができなくなってしまう。

順番を守る、少し待つ、我慢をする、ルールを守ることがスムーズに心地よく生活するために大切なことを学ばせることが大切です。

しかし、我慢ばかりではダメです。我慢した時は、大いに褒めたり、欲求を満足させてあげることも大切です。欲求を過度に刺激することも慎むべきです。すぐに買い与えてばかりいるより、待って、我慢してから、欲求を満たされた時の方が、喜びは大きくなります。

A君は兄弟が5人もいて、一番下のバッチで、いつもお下がりばかりでした。ある日、初めてピカピカの新しい靴を買ってもらいました。登園したA君は、私に、「ほら見て」と足を出して見せました。まるで、足が浮いているようにニコニコと輝いていました。翌日は、前日に降った雨で、園庭が少しドロドロになっていました。A君は、少し遊ぶと、直ぐに足洗い場の水道のところに戻ってきて、靴を脱ぎ靴底まで丁寧に洗って、また、外で遊んでいましたが、しばらくすると、洗った靴をテラスに置いて、なんと、今度は裸足で園庭に飛び出していきました。ピカピカの靴は、日の光を浴びて、前よりもピカピカと輝いていました。A君の喜びが、私の胸に伝わってきました。



あいさつ

(2015.10.01)



幼稚園に入った途端、一斉に「おはようございます！」と明るい声のシャワーを浴びます。私も大きな声で「おはようございまーす。今日はみんなの素晴らしい挨拶で、とても元気になりました。良い一日になります。」と挨拶を返します。園では挨拶を徹底して、みんなが明るく声を掛けあっているのです、周囲の雰囲気に乗って、自然に挨拶するようになります。ご家庭でも朝起きて「おはようございます」の挨拶から、就寝の「おやすみなさい」まで、沢山のあいさつがあります。

挨拶は、人と人との間のコミュニケーションの第一歩ですが、子どもの中にはとても緊張する子もいます。A君のお母さんから「うちの子はあいさつができないのです。いつもあいさつをするように厳しく注意しているのですが、困っています」と言われました。確かにA君は「おはようございます」と声を掛けても、こちらをチラッと一瞥して、顔をこわばらせて下を向いてしまうことがあります。しかし、友達と一緒にすると友達につられて挨拶します。友達と一緒にすると緊張することなく、自然に「おはようございます」と声のでるのでしょうか。隣家の子は、まだ1歳半なのですが、「おはようございます」と声を掛けても、私の顔をこわばった顔でじっと見ていましたが、最近は頭をペコッと下げるようになりました。私が大げさに喜んでみせると、少しはにこんだ笑顔になります。他人との接触への不安が強いと、言葉がでてこない「場面緘黙」症があります。家庭の中では、饒舌なのに、一歩外へ出ると黙りこくってしまったり、友達の中で遊んでいる時は自然と言葉が出てくるのに、先生の前に来ると黙ってしまう子がいます。赤ちゃんが誰にでも笑顔で応えていたのに、お母さんと他の人との違いを認識するようになると、急に「人見知り」して、他人に声を掛けられただけでも泣き出したりすることがあります。他人もお母さんと同じように、自分に接してくれるのだと、認識するようになると、突然、誰に対しても愛想よくなったりします。

さて、A君のことですが、そんなに心配することはありません。厳しく注意したり、無理に挨拶を強要すると、かえって緊張させてしまい、身を固くしてしまうことになります。友達の間や家庭の中では、緊張することなくリラックスして挨拶をしたり、話したりしているのですから。笑顔でゆったりと見守ってやるのが大切だと思います。ご家庭でも、園でも、明るく安心できる環境の中で、「挨拶」を交わし、手本を見せていれば、自然と挨拶するようになります。



子育て支援とは？

(2015.11.02)

NOVEMBER 

児童虐待が毎年増加している。虐待につながる家庭の状況は、その多くが、経済的な困難を伴っている。又、虐待する親の多くが、幼少期に虐待された経験があった。殴られて育ったため、子どもを育てるのに暴力をふるう必要があると思ってしまう。虐待の連鎖である。親も被害者であった。自分も親に厳しく育てられ、勉強も完璧を求められ、できないでいると殴られ、自分の子どもにも同じように求め、できないと体罰を加え、追い込む親がいる。同じように母親から育児放棄された人が、自分も同じように「この子さえいなければ」と食事をろくに与えず、虐待するようになる。子どもが虐待を受けずに安心して生活できるようにしたい。そのためには親への支援が必要だ。

昔のことだが、3人の子を幼稚園に通わせていたが、保育料も入園料も払わない人がいた。事情を聞くと、お父さんがいなくなり、お母さん一人で、早朝の仕事をし、家に帰り、子どもの朝食を作り、幼稚園に送り出すと、直ぐに仕事に出掛け、夕食の頃に家に帰り、夕食を食べさせると、また夜の仕事に出掛けなければならない、とのことだった。胸が痛くなった。何とか保育料を支払うと言った。「いつか、払えるようになったら払えばいいですよ。それより体に注意して下さい」としか言えなかった。このお母さんは虐待なんかしていなかったが、やはり支援が必要だった。川崎の河川敷で殺された中学生の事件があった時、このことを思い出してしまった。あのお母さんは5人もの子どもを抱え、獅子奮迅、身を粉にして、掛け持ちでパートをして、朝から夜中まで働いていたという。子どもに食べさせることだけで精いっぱいだった。

夢をつぐむ子育て支援が、政府の3本の矢の一つだというが、信じられない。4月に施行された子ども子育て支援法の趣旨は、子育て支援・保護者の負担軽減と、幼稚園も保育園も、公立も私立も分け隔てなく保障するようにするものだった。しかし、フタを開けてみると、一号認定で、第二子、第三子を幼稚園に通わせている人の中には、負担が増えている人がある。

口先ばかりでは夢はつぐめない。「子育て支援」とは、お母さん達が、もっとゆったりと子育てを楽しめるようにすることだと思う。オーストラリアのシドニー在住の友人から聞いた話では、子ども一人当たり多額の直接補助があるという。これなら経済的な理由から追い詰められている母親を救うことができる。先の3人の子持ちのお母さんも、川崎の5人の子を持つお母さんも、救われたであろう。



子どもを大切にする国

(2015.12.01)



受験地獄が低年齢化している。小学校低学年の時から遠くの塾に通い、夜の十時頃に帰宅する子が普通という生活である。幼稚園でも同じようなことが行われているところがある。

私の子どもの頃は、学校から帰ると、玄関にランドセルを放り投げて、近くの原っぱや公園で日の暮れるまで遊んだ。遊び疲れて空腹になり、家に帰ると家族みんなで、大きな丸いちゃぶ台を囲んで、競うように夕食を食べ、ぐっすりと眠り、宿題なんていつも忘れていた。いつもいつも楽しかった。悪ガキだったが、両親は勿論、町の人々みんなに見守られ愛された。

ルソーは、「早教育は、不確実な未来のために、現在を犠牲にする残酷な教育である。」と言っている。幼少期の生活は、やり直しができない。お受験小学校に入るため、家族の団らんもなく、普通の家なら家族揃って楽しく夕食の食卓を囲んでいる時間に、わずかに小学校三年や四年生が、コンビニのおにぎりやパンをかじって塾に通っている姿は異常だ。今、我慢すれば中学・高校受験で苦労しないからと言われ、毎日ドリルに向かわされ、間違えると叱咤される。常に緊張を強いられ、監視・監督され続け、休むことさえ許されない。しかし、なんとか受験校に入っても、家が、団らん、心のやすまる場所ではない。いつもテストの連続で順位をつけられる。成績が下がれば、また叱咤される。今我慢し、入ってしまえば苦労しないと言われたが、とんでもない。前よりもっと苦しくなる。これでは子どもがまともに育つわけがない。常に指示・命令され、自分の意思などないところで、自主性・自立心など育つわけがない。

「佳き日の思影」という本の中で、幕末・明治期に来日した外国人が、日本人の生活を見て、日本の庶民は、一様に貧しいけれど貧困はない、心豊かな生活だ、と言っている。エドワード・モースは「世界中で、日本ほど子どもが親切に扱われ、そして子どもの為に深い注意が這われる国はない。ニコニコしているところから判断すると、子ども達は朝から晩まで幸福であるらしい。」と言っている。当時の写真を見ると、みんなにこやかに笑っている。イザベラ・バードも、「日本人はもともと子どもを大切にする国民だ」と言っている。山上億良も「子どもは金銀財宝にも増して、宝である」と言っている。

しかし、欧米のキリスト教的文明に傾倒して、日本のそういう美風が破壊されつつあるとも、当時来日した外国人は述べている。そして、今まさに競争社会が子ども達の世界にまで入り込んで、競わされて脅かされ、心が休まる暇がないようになっている。

